「よい評価の踊り手の要因についての考察（その２）」

高　橋　系　子

Ⅰ　目　的

踊り手には様々な要因が必要とされ，その獲得のために踊り手たちが汗を流し，稽古に励むのはよく知られたことである。その踊り手にはどういった要因が必要なのか。舞踊において，その動きの美しさの必要性はもちろんだが，それ以上に必要なものがあり，それらが身に備わって「よい踊り手」とされるのではないかと考える。先行研究（高橋系子「よい評価の踊り手の要因に関する考察その１」）[1] での課題（音楽性，被験者の年齢，経験などの問題）に対し，検討，アンケートを改訂の後，今回の調査に至った。

Ⅱ　方　法

先行研究で得られた結果を元にアンケートを修正し，アンケート調査を行った。

1.　先行研究で生じた課題及び改訂

①音楽性に関する因子は抽出されなかったが，舞踊と音楽性の関連は切り離せないものと考え，アンケート上の項目の改訂を行った。

②仮に設けた「音楽性」に関してモダンダンス群とバレエ群にＴ検定で有意差が認められた。しかし各舞踊の経験平均年数（モダンダンス群 5.0 年，バレエ群 14.4 年）を変数としたＴ検定の結果でも有意差が認められたため，被験者の経験年数の考慮が必要とされた。

2.　アンケート実施について

①対象：クラシック・バレエ及びモダンダンスのスタジオに通っているもので高校生以上。

②配布方法：ア　直接手渡しの後，郵送による回収

イ　郵送による配布，回収

（413名に配布，282名回収　回収率68.2％）

③調査時期：1990年10月

④調査内容：

調査１：被験者の性別，年齢，各舞踊（モダンダンス，クラシック・バレエ）の経験年数

調査２：前回抽出された因子を仮のカテゴリーとして，各カテゴリーに関する順位づけを上位３位まであげてもらった（この課題に関する有効数は 271 名）

調査３：先行研究で抽出されたテクニック，表現性，感性，ルックス，空間・状況把握力，基本的体力・精神力，存在感，音楽性の８つの各カテゴリーの各要因51項目について５段階評定尺度により調査（有効 276 名）

3.　分析方法及び手順

調査１：対象者の年齢，経験年数の平均を全体，モダンダンス群，バレエ群に関して求めた。

調査２：各カテゴリーの順位づけについての頻度から要因の重要度を考察。

調査３：踊り手 276 名より得られたデータの因子分析を下の手順で行った。

・主因子解の結果から固有値が 1.0 以上のものを抽出。

・得られた因子行列に対してNormal Varimax による直行回転を行った。

・因子の解釈は命名可能な範囲とし，因子負荷量 0.4 以上のものを有効とした。

・モダンダンス群・バレエ群別にそれぞれの因子に対する価値評価を因子の平均得点をもとに試み得点差をＴテストにより検定した。

また，質問紙の信頼性をみるため，得られたデータをもとにクロンバックのα係数を算出した。

Ⅲ　結果と考察

1.　対象者の年齢及び経験年数

平均年齢は全体24.4才，モダンダンス群24.8才，バレエ群23.7才であり，平均経験年数は全体12.3年，モダンダンス群11.6年，バレエ群13.0年であった。

2.　各カテゴリーの順位づけについて（表１）

各カテゴリーで１位にあげられた頻度（人数）は以下の表のようになり，総合的には表現性，テクニック，存在感が高かった。

表1.　「各カテゴリーの頻度（271名）」（１位～３位）

数字は人数

	1位	2位	3位	のべ
1	表　現　性84	表　現　性73	テクニック62	表　現　性188
2	テクニック60	テクニック60	存　在　感53	テクニック182
3	存　在　感52	音　楽　性36	音　楽　性40	存　在　感135

中で最も重要なのは表現性と考えられ「表現的精神に反応するように身体を訓練しなければならない」[2] というように，テクニックに裏づけられた表現性が重要だと考えられていることが推察された。また，瞬時に消えていく舞踊で人の心にいかに印象を残すか，観客の共感をそこでいかに呼ぶかが舞踊手の課題となるのが当然であり，ここでは，存在感の重要性もみのがせないものであるということがうかがえた。

3.　因子の抽出と解釈・命名について

固有値 1.0 以上の基準で抽出された因子は14因子であり，累積貢献度は全分散の66.0％であった。この14因子に対しNormal Varimax 回転を行い，因子負荷量 0.4 以上の項目から各因子を解釈した

ところ10因子についての命名が可能となった(表2)。

抽出された10因子のうち，先行研究で課題とされた音楽性については今回の調査で抽出された。

表2 「Varimax回転後の抽出因子及び因子負落量（負荷量0.4 以上を有効)」

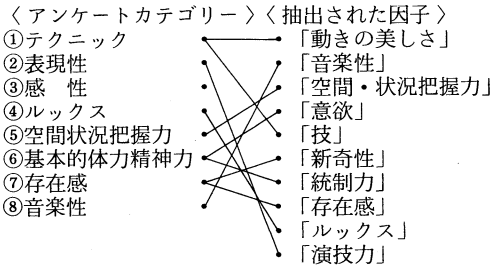
＊解釈命名した因子の横の数字が固有値及び貢献度(%)，各項目の横の数字が負荷量

因子の解釈命名／項目	固有値・貢献度／負荷量	
第一因子「動きの美しさ」	11.90391	23.1
V 6　ポーズが美しい		0.4392
V 7　上体が美しい		0.7360
V 8　腕の動きが美しい		0.8296
V 9　下肢（足）の動きが美しい		0.6643
第二因子「音楽性」	3.29612	6.5
V48　リズム感が良い		0.6726
V49　音楽の理解がよい		0.5501
V50　音の取り方がうまい		0.7767
V51　間の取り方がうまい		0.5744
第三因子「空間・状況把握力」	2.36609	4.6
V27　舞台空間をよく理解して踊れる		0.6476
V28　他のダンサーと自己の関係を理解して踊れる		0.6659
V29　役柄・テーマをよく理解して踊れる		0.5342
第四因子「意欲」	2.07892	4.1
V33　努力できる		0.7150
V34　意欲がある		0.6301
V35　集中力がある		0.5550
第五因子「技」	1.88515	3.7
V 4　ジャンプが美しい		0.7891
V 5　回転がうまい		0.7287
第六因子「新奇性」	1.76872	3.5
V43　個性がある		0.4288
V45　面白い（興味がひかれる）		0.6688
V46　新鮮さがある		0.6871
V47　ある程度は緊張感が感じられる		0.6657
第七因子「統制力」	1.71028	3.4
V31　あがらない		0.5675
V38　忍耐づよい		0.4612
V39　自分自身の心身状態をコントロールできる		0.4763
第八因子　「存在感」	1.49580	2.9
V41　登場すると無意識に目が追ってしまう		0.7726
V42　登場すると舞台がひきしまる		0.5864
V44　登場すると舞台が華やかになる		0.6450
第九因子「ルックス」	1.42528	2.8
V24　美人（美男）である		0.7929
V25　プロポーションがよい		0.8082
第十因子「演技力」	1.28091	2.4
V17　演技力がある		0.4708
V18　表情が豊かである		0.5453

抽出された因子は先行研究と比較すると図1のようになり，今回の調査では，先行研究で抽出された要因構造が分化された結果となって現れたということができよう。

4.　各舞踊群における要因への認識差について

図1.「アンケート上カテゴリーと抽出された因子」



モダンダンス群とバレエ群の抽出された因子に対する平均得点とその有意差のTテストによる検定で，認識差が明らかになったものは，「動きの美しさ」，「音楽性」，「意欲」，「技」，「存在感」，「ルックス」，「演技力」の7要因であった。1％水準での有意差が認められ，又，バレエ群の方が認識が高い（平均得点が高い）というものであった。

先行研究で考察されたように，モダンダンスとバレエの舞踊の種類による違いに起因するところが大きいように思われる。

しかし，この差はバレエの舞踊手に必要でモダンダンスには必要ないといえるほどのものではないと思われる。その点から，洋舞を代表すると考えられるモダンダンスもバレエもその踊り手の要因に関しては，根本的には大きな差がないのではないかということが推察される。

逆に得点差が認められなかった因子に関しては，身体運動としての根本的な部分，あるいは舞台芸術としての根本的な部分から生じる理由によるものではないかと考えられる。

尚，このアンケートに関する信頼性はα=0.9282でほぼ確保できたといえよう。

5.　まとめ

順位づけにおいては，先行研究と同様に「表現性」，「テクニック」が1位，2位を占めた。3位に選ばれた「存在感」については，被験者に専門家がより多く含まれていたことに起因するかもしれない。

因子分析に関しては，先行研究で抽出されたものがさらに細分化されて10因子となって現れた。

因子の認識度に関しては，舞踊の種類による差がくみ取れ，有意差無しの要因にはモダンダンス，バレエにかかわりなく，その根本的な部分に起因するのではないかということが考えられた。

〈参考及び引用文献〉

1）高橋系子「よい評価の踊り手の要因に関する考察（その1）」『東京体育学研究　1990年度報告』pp 9－12.
2）H・ドゥブラー，松本千代栄『舞踊学原論』大修館書店（p.74）